〝分かる〟ということ

長尾 眞
nagao makoto

科学的に分かること

〝水は何からできているか〟という問いに対しては、酸素と水素からできている、酸素（O）一つに水素（H）二つの割合で結合したもので、H_2Oと書くというのが、まずは科学の説明だろう。それで分かった気持ちになればそれでよいが、科学者はそれではすまない人種である。

〝酸素や水素は何でできているか〟と再び

問うのである。そこで、これらは電子と原子核とからなっていると答える。では原子核は？という問いに対しては、陽子と中性子とからなる。では陽子は？　というように無限に深く問いかけをしていくのが科学である。しかし、無限に問うことは不可能であるので、例えば〝陽子はハドロンと称するものの一つであって、それ以上に詳しいことは現段階では分からない。研究中である〟ということになる。

科学が、なぜ確固たる説明体系をもっているかといえば、あらゆる物質をこのように原子やそれを構成する電子や陽子、中性子といったもので説明することによって、（現時点では）何の矛盾も発見されないということで、この説明の体系が保障されているからである。これが自然科学の体系であり、科学的理解ということなのである。

常識的に分かること

ところで、このような科学的説明で〝水〟というものが分かったとしてよいのだろうか。そうではないだろう。〝人間は、水を飲まねば死んでしまう〟ということは知っていないと大変なことになる。このごろの都会の人たちは水道水のご厄介になっていて、自然のなかの水はまったく知らないでいる。田舎に行けば井戸水、湧水、せせらぎの水などが豊富で、日本は実に水に恵まれた国であることが実感されるにもかかわらず、である。

国連などの統計では、現在、世界の人口の三分の一が水不足の状況におかれており、それが二〇二五年には三分の二に達する恐れがあると報じられている（日本経済新聞、二〇〇七年七月二十一日）が、これは、とても見過ごすことのできないことであろう。

このように〝水〟という概念だけをとっても、科学的説明とともに、現実世界におけるさまざまな水の実態を見たり、われわれの生活に水がどのように大切な役割を果たしているかとか、世界各地において水のあり方がいかに違うかということを知ることも大切である。

経験的に分かること

以上述べてきたことは、ほとんどの場合、いわゆる知識として知っていることである。〝海の水は塩辛い〟といっても、どの程度塩辛いのかは口に含んでみなければ分からない。〝湧き出る清水は冷たくてうまい〟とか、〝ペットボトルの水は片手で持てるが、バケツの水は両手で持たねば重くて手が痛くなる〟といったことは実際に経験しなければ分からない。スポーツなどにおける多くの技術は、本で勉強しただけでは理屈として分かっても、いざそれを実行するとなるとまったくできないわけである。いろいろと体を動かしてみて、〝なるほど、こうやったらいいのか〟といった感じを掴（つか）むことが大切である。体で憶えると言われていることである。

謎が解ける

背丈はずいぶん違うが、顔がよく似た二人の人がいたとき、この人たちは兄弟だと言われたら、〝なるほど〟となる。幾何学の定理の証明の問題に取り組んでいて、いっこうにどうしたら証明できるか分からないときに、先生から〝ここに補助線を引いてごらん〟と言われた途端、解答の筋道がはっきりと分かるということもよくある。推理小説とかミステリーと言われているもののほとんどは、その最後のところで、ある事実が示されて、それまでのすべてについて謎が解（と）けるという筋書きである。

このような場合は〝理解できた〟というよりは、〝わかった！〟という感覚的なものであると言ってよいだろう。つまりこの場合は、新たに知識を得たのではなく、不思議だと思

っていたある状況が、自分のもっている知識によって解釈できたという場合である。ひと言ヒントを与えられれば、自分の頭のなかに説明の道筋ができ上がるのである。

論理的に正しくても！

数人でご馳走を食べている場面を考えよう。テーブルの自分の手の届かないところに塩や胡椒などの調味料が置いてあるとき、それを指さして、〝それ、お塩ですか〟と向かい側に座っている人に聞いたとする。その人が〝そうですよ〟とだけ言って、それ以上何もしないとしたらどうだろう。なんと気の利かない人だろうと腹を立てるかもしれない。この質問は、塩をこちらに廻してくださいと言っているのだから。

このように、ある種の発言には、そこに直接表現されていない事柄が含まれているわけで、こういったときには聞いている人は発言した人の意図を推定しないとだめなのである。〝十二時になったよ〟と言えば、仕事をやめて昼食に行こうじゃないか、と言っているのである。こういうことに気づかなければ、論理的に正しい応答をしても何の役にも立たず、他人といっしょに日常生活がやっていけなくなってしまう。

分かることのすれ違い

車で来た人が道端の人に、〝このあたりに、切手を売っているところはありますか？〟と聞いたとしよう。〝郵便局はここから数分先です〟という答えが返ってくると、車の人は〝えっ、そんなに遠いのですか〟と言う。道端の人は〝いや、すぐそこですよ〟と答える。

この会話には何かちぐはぐなところがあると感じるだろう。車の人は車で行くことを当然と考えているから、数分はずいぶん遠いと思ってしまう。これに対して、道端の人は歩いていく距離を考えている。そこに認識のずれがあるから〝えっ？〟ということになる。また車の人は、何も郵便局でなくても近くのコンビニかどこかで切手が入手できればいいと思っているのに、わざわざ遠い郵便局を言われても、と思ったに違いない。

このように、人と人との対話においてはよく誤解が起こる。こういった誤解がないようにしようとすれば、詳しく説明するとか、〝えっ？　車で数分ですか〟〝近くに切手を売っているコンビニはありませんか〟といった対話をすることによって、お互いの間の誤解をなくし、同じ理解の状況を作り出すことが大切である。

今日、世界のあちこちで紛争が起こっている。しかも、武力によって物事を解決しようとしているが、これはまったく解決にならないことは歴史が示している。国と国との間の相互理解は確かに難しいが、不可能かといえば、必ずしもそうとは言えない。第二次世界大戦後、ヨーロッパは一定の相互理解の状態になり、ヨーロッパ共同体を形成し、いろいろな問題を抱えながらも、より強固な統一体の方向への努力をしている。これから地球はいよいよ狭くなっていくから、他国をよりよく理解する努力を積み重ねてゆかざるをえず、そうすることによってヨーロッパ共同体と同じように、いつかは世界全体が武力衝突せずに共存することができるようになっていくに違いない。

分かることと悟ること

科学は対象を客観的に見て、それが何からできているか、どのような現象であるかといったことを分析する。つまり、分析を行う対象は必ず自分の外に存在するものである。

では、観察し、分析する対象が自分そのものである場合はどうなるだろう。つまり〝自分とは何なのか〟〝どうして自分は、いまここに生きているのか〟という質問になる。この質問に対して、現在の科学は対応すること

ができないでいる。生理学的に人間を調べたり、人間の脳の活動を研究したり、また、人の心を心理学的に研究したりすることが広く行われているが、研究する人からすれば、これらはすべて外部に存在する客観的対象であり、〝自分とは何なのか〟という疑問に答えられるものではない。

自分を外に存在する客観的対象として眺めようとすると、自分を眺めている自分というものをまた観察しなければならなくなる。このように、自分が自分を分かるということは堂々巡りであって、いかに科学的に分析的努力をしても解決には至らない。したがってこれを達成しようとすれば、自分を眺める堂々巡りの全体を直感的にとらえること、つまり、無限というものに一挙に至りつく飛躍、いわば〝悟り〟ということが必要となるのではないか。

お釈迦さまの悟り

お釈迦さまは、〝自己とは何か〟をほとんど語られなかったようですが、この問いを自らに発せられたことはたぶん間違いないでしょう。そして、長い苦行の末に悟りの境地に至り、以後は、その道を皆に伝える努力をされました。自分を分かるということは、そのような悟りの過程を経ることによってしか生じ得ないのかもしれません。

私は、自分の存在というものについていろいろと悩みましたが、十四、五歳のころ忽然としてその悩みが解消しました。自分の存在を否定することは、文字どおり〝自分を無にする〟ことですが、〝自分を無にしながら、なおかつ人と共にこの世に生きる〟ということの意味、大切さを自覚したのでした。それ以降今日まで、少しずつ堕落をしながらも、何とか〝自分を無にした生き方〟への努力を忘れずに毎日を生きているつもりです。

法然、親鸞の教えは、お釈迦さまの時代の原始仏教とはずいぶん違った世界ですが、南無阿弥陀仏を称え、専修念仏、本願他力を成就するためには、自分を無にし、全的に仏さまに身をゆだねることが必要なのでしょう。いずれにしても、〝分かる〟を超えたところに〝悟る〟という世界があるのだと存じます。

情の時代

古代ギリシャ以来の西洋の歴史を大まかに眺めますと、〝知・情・意〟の繰り返しがあることに気づきます。古代ギリシャは知の世界でした。中世はキリスト教の支配した情の時代、ルネッサンスからフランス革命までは意の時代であり、さらに十九、二十世紀は科学技術が発展した、まさに知の時代でした。この科学技術のおかげで、今日享受している豊かな現代文明が作られてきたのです。

しかし、科学技術はまた多くの負の遺産も残してきました。地球温暖化、環境問題はその代表的なものであります。今日、科学技術を一方的に礼讃するのでなく、むしろこれを批判的に見る人も増えてきています。科学技術はもうこれ以上発展してくれなくてもよい、もっと人の心を大切にしたいという人も多くおられます。

したがって、このような困難な状況を見ると、知の時代はそろそろ終わりに近づき、心の時代、情の時代に移りつつあるのではないかと思われます。そこでは、他人をよく理解すること、相手を慈悲・寛容の心をもって受け止めることが最も大切であるという時代になっていくでしょう。そうでなければ、世界の武力衝突はなくすことができません。ただそこでの情は、単純な情ではなく、しっかりした論理に支えられた情でなければなりません。この情の大切さが国際的に広く理解されるには、二十一世紀の百年が必要かもしれませんが、お互いに分かり合う努力以外に解決の方法はないと思います。

（ながお　まこと・国立国会図書館長、元京都大学総長）
著書に『「わかる」とは何か』岩波新書